22J-am07

ベンゾジアゼピン受容体作動薬減薬時の薬局薬剤師のサポートに関する検証

○伊藤 あゆみ[1], 辻 鈴美[1], 内野 友理[1], 中村 真理[1], 谷井 真由美[1], 堺 貴輝[2], 安本 奈悠[2]（[1]さくら薬局, [2]クラフト）

【目的】2017 年 3 月、PMDA よりベンゾジアゼピン受容体作動薬の依存性について注意喚起が発表された。これにより、向精神薬の多剤併用や長期処方が見直されるようになったが、減薬後の患者サポートに薬局薬剤師が積極的に関わりながら、医療機関と連携を図りスムーズな減薬が行えるかを検証する。

【方法】2018 年 4 月、ベンゾジアゼピン受容体作動薬の減薬意義について医療機関に周知した。減薬に賛同して頂ける医師と連携を図りながら、減薬の具体的方法や代替薬についての勉強会を複数回実施した。2018 年 5 月～9 月の間に、過去 1 年間ベンゾジアゼピン受容体作動薬を同量同用法で服用し、減薬指示が出された患者を対象に、テレフォントレースや服薬後の体調変化確認などの患者フォローアップを行い、その内容を服薬情報提供書で医療機関に提供した。減薬開始から 3 か月後以降に再評価を行い、減薬が維持できているか検証し減量達成率を算出した。

【結果】ベンゾジアゼピン受容体作動薬の減薬を試みた患者 15 人のうち服用中止となった患者 3 人(20.0%)、半分以下に減量が 10 人(66.7%)、減薬中断が 2 人(13.3%)だった。3 か月後に減薬を維持できている割合は 86.7%と分かった。

【考察】受診と受診の間の服薬管理に薬局薬剤師が積極的に介入することで、86.7%の患者で減薬が維持できたことが分かった。減薬が維持できたことは患者の精神的不安などを除き安心して服薬できる環境を提供したためと思われる。患者に最適な薬物治療を提供するためにも薬局薬剤師の介入が必要不可欠であり、積極的に関わっていくことが重要である。